

精神疾患のイメージ比較

○ 五百竹亮丞¹・井川純一²

(¹呉みどりヶ丘病院・²大分大学)

目的

精神障害に対するスティグマが、回復を阻害するという知見が認められている (Corrigan, Druss, & Perlick, 2014)。このスティグマ軽減への取り組みの例として、DSM-III (1980) におけるアルコール中毒からアルコール依存症へ診断名の変更、また我が国における精神分裂病から統合失調症への名称変更などが挙げられる (日本精神神経学会, 2000)。一方、これら名称変更後のイメージの変化についての研究は非常に少ない。そこで、本研究では、統合失調症とアルコール依存症に着目し、その名称変更前後の認知度及び疾患に対するイメージについての比較調査を行った。

方法

手続き 大分大学経済学部の学生 81 名 (男性 49 名, 女性 30 名, 未記入 2 名, 平均年齢 20.24 歳) を対象として、講義内で質問紙を配布した。参加者は、“アルコール依存症 (Al) / 統合失調症 (Sc) / 病气 (統制群 Cn) の A さんは再入院した”という 3 条件のシナリオ (被験者間要因) を読み、以下の質問紙に回答した。

質問紙 性別、年齢等の個人属性に加え、各疾病 (アルコール依存症, 統合失調症, アルコール中毒, 精神分裂病) の認知度を 5 件法で求めた。A さんに対するイメージの評定には、Link スティグマ尺度日本版 12 項目 (下津, 2006)、特性形容詞尺度 20 項目 (林, 1978) に加えて、オリジナルの帰属評定項目 11 項目を用いた。

結果

認知度の差異 疾病 (アルコール / 統合失調症) 及び名称 (旧 / 新) の 2 要因分散分析 (参加者内要因) を行った結果、疾病の主効果 ($F(1, 78)=89.84, \eta^2=.54, p<.01$), 名称の主効果 ($F(1, 78)=39.87, \eta^2=.34, p<.01$) 及び交互作用 ($F(1, 78)=20.16, \eta^2=.21, p<.01$) が認められた。統合失調症よりもアルコール依存症の認知度が高く、統合失調症において認められた新旧名称の認知度の差異はアルコール依存症においては認められなかった。

疾患別イメージ比較

それぞれの尺度の探索的因子分析を行ったところ、Link スティグマ尺度では、“不信”と“関係性忌避”の 2 因子、特性形容詞尺度では、“社会的望ましき”、“個人的望ましき”、“力本性”の 3 因子が抽出された。1 要因分散分析を用いて、各因子得点の条件間の差を検討した結果、不信、関係性忌避、社会的望ましきに主効果が認められた。また、帰属評定項目においては、治療意欲、意志の弱さ、性格、治療の自己中断に主効果が認められた。それぞれの結果を Table 1 に示す。これらの結果はすべてアルコール依存症が統制群や統合失調症と比較してネガティブに捉えられていることを示した。

Table 1 各因子得点及び帰属評定項目の条件間の差

	<i>F</i>	η^2		条件間の差
不信 (スティグマ)	31.58	.45	**	Al(a), Sc(b), Cn(c)
関係性忌避 (スティグマ)	8.84	.19	**	Al(a), Sc(ab), Cn(b)
社会的望ましき (特性)	2.73	.37	**	Al(a), Sc(b), Cn(b)
治療意欲 (帰属)	4.96	.12	**	Al(a), Sc(b), Cn(b)
意志の弱さ (帰属)	36.44	.49	**	Al(a), Sc(b), Cn(b)
性格 (帰属)	23.81	.39	**	Al(a), Sc(b), Cn(b)
治療の自己中断 (帰属)	7.70	.17	**	Al(a), Sc(b), Cn(b)

** $p < .01$

考察

統合失調症については、新名称が一般に普及している一方、アルコール依存症においては、新旧の名称が同程度に認知されていた。また、アルコール依存症は、統合失調症や統制群と比較し、ネガティブなイメージを持たれていることが明らかとなった。これらの結果は、アルコール依存症については名称変更の効果が十分に得られておらず依然としてスティグマが存在していることを示唆している。

引用文献

- Patrick W. Corrigan, Benjamin G. Druss, Deborah A. Perlick (2014) The Impact of Mental Illness Stigma on Seeking and Participating in Mental Health Care, *Psychological Science in the Public Interest*.
- 林文俊 (1978) 対人認知構造の基本次元についての一考察, 名古屋大学教育学部紀要, **25**, 233-247
- 下津咲絵・坂本真士・堀川直史・坂野雄二 (2006) Link スティグマ尺度日本版の信頼性・妥当性の検討, *精神科治療学*, **21**, 521-528.